

残胃癌の早期発見：内視鏡によるスクリーニングの役割

Early detection of gastric remnant carcinoma: the role of gastroscopic screening: Green, FL (Arch Surg 122: 300-303, 1987)

以前より胃の良性疾患の術後に残胃癌発生の頻度が高いという報告がある。著者らは1960～1975の間にSouth Carolina 大学医学部と関連病院で良性疾患に対して部分的な胃切除術を受けた患者を対象に内視鏡による残胃癌のスクリーニングをレトロスペクティブな方法で検討し、次のような結論を得た。

1) ルーチン胃内視鏡検査は残胃癌を治癒可能な段階で早期に発見する。

2) 術後10年から毎年検査すべきである。

3) 内視鏡生検は胃X線検査より正確である。

著者らのデータによると胃切除術を受けた233人のうち約70%に当たる163人が1980年から1985年の間に内視鏡でスクリーニングされた。その結果、4人の残胃癌が発見され頻度は2.5%で、予測値2.9%とはほぼ同一であった。

これら4人の残胃癌患者は無症状者で検査値も正常であった。術後胃癌発見までの期間は15年から22年平均19.4年であった。胃潰瘍は3例で、そのうち2例はB-I法で、1例はB-II法で手術された。十二指腸患者の1例はB-II法で手術された。これら4人の患者はいずれも原

疾患の手術時年齢が50歳以上であった。

同時期にスクリーニング計画から除外された患者の中から2人の残胃癌が診断された。症状発現がきっかけで検査され、術後2か月で死亡した。

胃X線検査は内視鏡で発見された4人の残胃癌の診断には無効であった。更に内視鏡で診断された後、レビューされたが異常を指摘することはできなかった。

以上のごとく著者らは残胃癌の早期発見には無症状者で内視鏡スクリーニングをすることが極めて有効であると強調した。

(愛知県がんセンター消化器内科

松浦 昭 抄)